



ピエタ

第1集 2022

三原晶子

夕方の町角で…………… 4

Love Song…………… 8

長崎…………… 10

晩夏…………… 12

レナードの朝…………… 15

我が町の滑川…………… 18

梵鐘…………… 21

近岡礼

大池一…………… 28

大池二…………… 30

カミオカンデ…………… 32

あとがき…………… 35

三原晶子

夕方の街角で：

職場で 二週間の 休みを もらった：
心を 癒し 整えるために

躁鬱傾向の 強い 状態

母には 納得が できなくて：

出勤しない 私を どうしても

許せない みたい：

母と 鉢合わせに なるの

避けるために

ふらっと 慣れない

夕方の 外出 してみた：

洗い立ての 髪と ポロシャツと簡単なワイドパンツで：

バスに 乗り込み 駅に 向かった：

バス降りて 数歩の ところで：

国連難民支援の スタッフに 捕まった

犬も 歩けば 棒に当たる： とは

このこと：

これは 何かの きっかけ
与えられたのだと 思つて：

活動の概略と 支援の方法

熱心に 聞いた：

主治医にも 職場にも

恵まれた この日の 私に

難民で 苦しんでいる 人々の

姿が 直結した：

母と 職場への 申し訳なさが
手伝つて

気づいたら 国連難民サポートに

申し込んでいた：

活動報告書もらって スタッフと別れると

カフェで 各国の 現状と支援

読んで 涙がにじんだ：

金額を抑えて 細々と

栄養食の 支援 続けようか：

パンフレット リュックに押し込み：

街中に 紛れた：

Love Song

My friend asks me, “ Is he handsome?”

And I say, “ No, he is not handsome but decent.”

My friend asks me, “ Is he good to you?”

And I say, “ He is kind,” “ kind like a tiger in the wild.”

My friend asks me, “ Is he gentle?”

And I say, “ He is gently true inside...”

My friend asks me, “ Is he ambitious enough as a young one?”

And I say, “ He is not a daydreamer but a realistic man in an ambitious manner.”

My friend asks me, “ Is he promising as a man?”

And I say, “ I don't know, but he has two hands with heavenly positive mind.”

My friend asks me, “ Does he embrace you in his arms?”

And I laugh and say, “ It won't happen but he is sure to wipe my tears when I cry.”

Someone asked me if he is totally honest with me or not.

And I told her he is achingly straight at heart in all he does and he makes me cry.

長崎

長崎原爆の日：

父が テレビの前 身をのり出して

黙祷する：

聖歌四二二番の 「長崎の空」は

美しい 旋律と歌詞

記念の 名歌

全ての 空は 「足もとからはじまっている」

焼失した 大地の 奥より
呻きと 共に 空 見上げた
幾千もの 命

焼失した 大地の 上
立ち上がってきた
幾万もの 命

失われた 命の 上に
希望の 芽を 紡ぐために：

全ての 空は 「足もとからはじまっている」

今日という 繋がりの その先に

晩夏

船橋の 洋子さんが 若い頃の
浴衣を 下さった…

うすむらさきの キキョウの 染め
白い 浴衣 ほどこされた

停留所で バス 待つ 母と
晩夏の そよ風に あたった

天気予報よりも 早い

雨天に 見舞われて
二人 傘を さした

待てど暮らせど 鎌倉駅行き京急バスは
来なくて

道行く 車や バイクに 乗る人の 目が
気になった

履き心地のよい 木目の下駄に：
素足が 冷たくて

駅前の カフェで カフェオレを 運ぶ
ぺたぺたと いう 歩幅 楽しかった

雨雲あまぐも 恐れ 足早に

バスに乗り込み 家路に ついた

ほどよく のりの効いた 浴衣生地の
すがすがしさ

おぼつかぬ 足元の

地面打つ音の こちよさ

レナードの朝

ロバート・デニロが演じた
実話を元にした 映画作品
「レナードの朝」

大切な大切な作品と
思ったが

そのあらすじは切なく

ある慢性神経病患者が

新薬により覚醒し

また元の状態に戻っていく物語

「アルジャーノンに花束を」と
似ていて
私の心に影を落とす作品

薬によって
健常者に
なれたら：

そんな魔法があつたら
空高く
駆け巡るのに：

いつでも
健康で
いられたなら：

誰よりも

温かく

世界抱きしめるのに

薬と自分との

付き合いは

続く

無力と挫折の

引き潮に

戻され海にまみれて

我が町の滑川なめりがわ

町の隅々で 流れる 細流や河川：
材木座海岸と由比ヶ浜 隔てる 河口から 海に注ぐ

我が家の 近く 蛇行する 河川は
浅い水流や： 雨の日の 濁流 流す
堂々の 本流 滑川

滑川が つむじを曲げて
豪雨で 溢れ出したり： 津波で 逆流してきたら

その時は　しかたない　諦めよう　と　母はいう

駅へと　続く　車道に　平行して

滑川は　くねくねと　曲がり

桜や　楓や　みかんの樹　川べりに生えさせ

少量の鯉を　泳がす：

駅に向かう　道すがら

太った：　鯉たちの　行方

退屈しのぎに　覗き込む

初夏のある日

川べりの柵から　水底見下ろすと

限られた　水位の　中に　数匹の鯉を見つけた

成魚に紛れ：

生まれて初めて： 赤ちゃん鯉を 見つけた：

金魚のように 薄く豊かな尾ひれ なびかせ：

白い鱗の表面： うっすら 金色に 輝かせていた：

梵鐘

梵鐘とは 寺の境内の 一隅に 吊るされた 銅製の 鐘のこと…

秋の 夕暮れに 浄明寺(地名)に 行き渡る
杉本寺*の 梵鐘すきもとでらの音ねを 思い描いてみた

宅地の 家々を くまなく 降り注ぐ

粉雪のような 音の 残像

鎌倉五山*浄妙寺と 響なき合う その音ねの 真髓は

「梵 Ⅱ (すなわち) 清浄 神聖なもの」
と 言うこと らしい：

心 なららかに 梵鐘の ごとく
鳴り響きたい：

例え ささやかにしても 光： 灯して 先をゆきたい：

「梵鐘」という 詩を 書き終えた時：

私の 耳には：

「ぼんぷだ ぼんぷだ

ぼんぷだ：」 という 声が 鳴り響いて：

「ぼんぷ」の 綴りさえ 意味さえ わからぬままに
その響きは 私の 意識の隙間で 鳴り続けた：

不思議に 私は その声に 留まり 了解していて：

「凡夫」とは 「煩惱にとらわれて迷いから抜け出られない衆生」という ことだった：

なるほど 凡夫なり： 我は 大いに 凡夫なり
しかし： 愚かしさの大波にまみれ

いつか ひた伝う 涙 一筋が あるならば：
洗い清められ 浄化されて

心の 波紋に 梵鐘を 鳴らしたい

然れど 浄化し切ること能わぬ

凡夫として

静寂に近い ささやかな梵鐘の 音ねの

ごとくに なりたい：

(※杉本寺：杉本観音、鎌倉で一番古いお寺とされる)

(※鎌倉五山：臨濟宗の寺格を表し、鎌倉では建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、
浄妙寺の順)

近
岡
礼

大池 一

死のひととき

おお 蒼き空

縫い針一本

血が滲む

山の中の

大池に向かう これから

桜はまだ だろう

紫外線が 眼を射るだろう

縄文人が ソーラーパネルの上で跳ねている だろう

私はどこに いるのだろう

夢で逢える人は 泥人形だ

この埋め合わせは いつ

火星に逃げていく奴の足を 引っ張る

火星人が 夜のトイレにいた

おでん屋で 小学校の先生の 腕時計を盗む

人は一人で 生きてゆける

大池 二

大池を歩き

縄文人が立小便をしていた

トンボはいなくて

広い空が落ちてきた

今度は誰と来ることでしょう

首を絞めたくなるほど心地いい

人間さまの心変わり

自然さまの嫉妬

ああ 今夜も風呂に入らない

今日、ボールペンは私の家来だ

カミオカンデ

墓があり

明日はカミオカンデに行く

かつて

街に溺れた――

桜があつた　かもしれない

爽やかな風が吹いていた

昨夜見た夢の話をした　かもしれない

その人は

どこかに睡をつけた　かもしれない

何か約束をした　かもしれない

私は行かないけれど……

別れるためにこの世にやってきたから
宿業と諦めきれない君は

太陽系外生物——

幼い頃君の父は君を

母の手から奪った

君が吃音なのは

新しい母に恋したからだったね

あとがき

三原晶子さんは二〇二二年度金澤詩人賞を受賞されました。

三原さんの詩風は《ピエタ》です。ピエタはイタリア語で「哀れみ」「慈悲」という意味で、ミケランジェロが彫刻した、死んで十字架から降ろされたキリストを抱く母マリア像が、ピエタを表現する代表作とされています。

三原さんが描かれる些細な日常には、周囲へのやわらかい眼差しがあり、柳の産毛のような繊細さは《ピエタ》に相違ないのです。

私は仏教の唯識思想で説く阿頼耶識（あらやしき）（無意識層）を突ついてみれば、自ずと出てくるかもしれない言語を書き連ねてみました。無意識層は《恒転如暴流》（ごうてんによほる）の様相を持ち、善悪を超えた無法地帯らしく、ゆえにこの支離滅裂な詩は、読まれる方にとっては苦痛以外の何物でもないと感じます。（近岡）

ピエタ 第一集

発行 二〇二三年五月一日

発行者 近岡礼

発行所 〒九三五〇〇三二

富山県氷見市朝日本町四番十三号

TEL 〇九〇―三二九八―一六八二

mimi.7.kei@gmail.com